



3/1 3年生の入試直前ゼミ最終日。よくがんばりました！



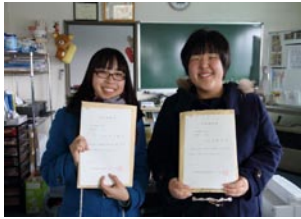
3/3 入試前日、家に居ても落ち着かないので塾に来て勉強。



3/4 入試当日、試験後の自己採点、頑張った結果は出せました。あとは3/17の発表を待ちます。長い！



3/17 合格発表、湖陵高校で。



合格した松井さんと佐藤さん



3/4 入試当日は雪だった。高校卒業生が雪かきを！



3/14 大学進学が決まった卒業生とたこ焼きパーティー



音だけのクラッカーで盛り上がる



初めてなので皆、真剣！



増山さんのお母さんからイチゴの差入れ 高専の4年生になれた田村君 ポーズを決める木村、阿部さん KFCもありました



3/5の合格発表を塾で見る。合格者はわずか19名

高校生で最後までステップゼミナールに在籍し、初めて国公立大学に合格した増山紗弓さん(美原中・湖陵)合格通知書が届いてとても嬉しそう。



完成間近で、栗野君も手伝った！



栗野君のお父さんのあわの歯科にあった科学雑誌 Newton もらえることになったので大本先生がラックを作成しました！



Newton はとてもためになる科学雑誌です。読んでね！

★**新年度・新学期のスタート**★
27年度が始まります。特に新中1生、新高1生にとっては全く新しい環境と内容の勉強が始まります。何事も最初が肝心です。今までとは違う環境に早く慣れ、中学校、高校それぞれの学習のペースを身につけることが大切です。
一般的に中学校は復習、高校は予習が基本です。中学校も高校も3年間の基礎は1年生の勉強にあります。3年後、中学生は高校入試、高校生は大学や専門学校などへ行くための試験があります。
勉強をする上で必要なことは明確な目標があることです。将来なりたいものがあるなら勉強するしかないからです。
勉強で結果を出すには素直に指導に従い、毎日コツコツやることです。やっっているつもりになっていないからです。

る、言い訳ばかりを言っているようでは結果は出ません。
元気に挨拶ができ、時間を守り、やらなければならないことが出来れば必ず結果に繋がります。(ちゃんと挨拶の出来ない人がいます)
新中3生は、入試まで11ヶ月しかありません。そして修学旅行、中体連、学校祭と行事あって、それが終わったときにはもう9月で、学力A、B、CのAテストが始まります。
学校の行事に引きずられること無く自分の志望校に向かってしっかり取り組むことが大切です。1、2年生の復習と3年生の勉強を同時にやらなければならないのでちよつと大変です。
高校入試までおよそ50週です。(3月20日時点で)あつという間にその日が来ます。「頑張りましたよ」

★**祝合格 おめでとう！**★
今年度は高校生の塾生6名が大学、専門学校に合格しました。(写真上から)
増山紗弓さん(湖陵) 群馬県立女子大学 美学美術史学科
阿部美咲さん(湖陵) 教育大学旭川校 教育学部
石川洋子さん(湖陵) 藤女子大学 文学部
井沼 忍さん(江南) 札幌医学技術福祉歯科専門学校
言語聴覚士科
木村侑里さん(明輝) 北星学園短期大学 生活創造学科
栗野秀哉 君(湖陵) 明海大学 歯学部 歯学科
皆さん、合格おめでとうございます。これから先の勉強も大変だと思いますが頑張ってください。

★**漢字検定と数学検定の受験について**★
26年度までステップゼミナールでは国語力のアップを目標として漢字検定受験を必須としてきました。それに伴い年2度の受験では1ヶ月ほど前から合格のための対策を行ってききました。その結果、高い合格率を維持してきました。
しかし、27年度より受験料が大幅に値上がりし、負担が大きいため塾としての受験は行わないことになりました。
検定のための対策は行いませんが、希望者が10名以上いれば塾での受験は可能です。
また、数学検定については、検定主催者と見解の相違(かなりもめました)から受験の中止を決定しました。どうしても受験したい人は学校や他の受験会場でお願いします。漢字力と計算力は勉強の基礎です。しっかり取り組みましょう。

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水
	昭和の日			休塾							休塾							休塾							休塾	春期講座	中3道コン	中1・2道コン	春期講座

携帯電話の
教定持込禁止
携帯電話の持込は禁止
連絡は塾の電話を使用
して下さい。

4月の予定

■ 居 場 所 ■

川崎で中学一年生が殺害された事件は、同じ年頃の子供を持つ親でなくても、他人事として考えられない何かがある。

友人関係者や顔見知りの人だけでなく、少年の死を悼んで、遠方から大勢の人達が現場にやってきて、中には涙を流しながら献花をしている人もいる。そして、殺害を認めているのが18歳の少年で、あまりにも残虐な事件に胸を痛める人達は、犯人が少年法で裁かれるのは納得いかないと言う。

近年、残虐性を増す少年犯罪、不登校、引きこもり、そして家族をはじめ周りの大人達が子供達の異変に気づくことができないこと。また、今回の事件のように、母子家庭などで周りの助けを得られず、一人で子供の問題を抱え込まなければならないケースの増加。

何かとてつもなく社会が窮屈で、閉鎖的で、かつ分裂状態になっていて生きづらく、一歩間違えば自分も、自分の子供も同じ運命になる可能性があるという危機感を多くの人が抱いている。事件になるのは氷山の一角で、水面下には巨大な問題の氷塊が沈んでいると。

最近、私は、全国から引きこもりや不登校や暴力その他の行為で中学校や高校を退学した子供達が、もう一度一から色々なことを学んでいくために通っている北海道の高校、北星学園余市高等学校を取材して『居場所』という一冊の本を作った。

この高校を卒業して今は社会人として働いている人、大学生になっている人など、大阪、京都、東京、札幌で、16名の声を聞いた。

そして彼らが、自らの過去を振り返り、まとめた文章を編集させていただいた。さらに現在の姿を、写真家の鬼海弘雄さんに撮影してもらった。

鬼海弘雄さんは、国際的にも名の通った写真家だが、それはともかく、多くの写真家に尊敬されている写真家である。写真家に限らず、他の表現分野にも一目置かれている写真界では貴重な存在である。なぜかという、世間の流行や評価に流されず、自分の軸をぶらさず、自分が大事だと思うことを妥協せずに表現し続けているからである。

鬼海さんは、世間の評判ばかり気にして自己顕示欲が強い自称アーティストが多い現代社会の中で、世間の移り気な評判よりも、自分が死んだ後にも残るきちんとした仕事をしたと考えている真の意味での芸術家なのである。

その鬼海さんに、この学校の取材を相談したところ、「悩んでいる人にも、悩んでいない人にも、大切なことだから」という理由で即答で引き受けてくれた。

中学校や高校の時に、不良というレッテルを貼られ、荒れまくっていたという少年や、ずっと引きこもりだったという少女と会う前は、いったいどんな風なんだろうとドキドキしたが、会ってみると、好青年で、表情もよく、相手を不快にさせない社交性も持っていて、清々しい印象を持つことが多かった。

ニュースなどで、周りからは真面目だと思われていた人がまさかあんなことを、あの人がそんなことをするなんて意外だ、というコメントがよく紹介されるが、それと同じということではない。

私が会った彼らは、北海道の雪深いところで親元を離れて暮らしながら、教師や寮のおじさんやおばさんを通して生まれ変わったのだ。たった三年で、それまでの自分とまったく違う自分になったということが、彼らを書いた手記を読んでもわかる。

しかし、それと同じように、ちょっとしたことで、まったく逆の方に変ってしまう可能性もあるということだ。彼らに限らず、どんな人間でも、スパイラルがどちらの方向に向いていくかは紙一重なんだと思う。

とりわけ少年や少女を良くも悪くも大きく変えてしまうのは、周りの大人だ。私が出会った彼らもまた、少年時代、色々な大人との関係があった。彼らは、大人達に対して恨み言を言っているわけではないが、大人の言動が、彼らの心を蝕んでしまった原因の一つであることは伝わってくる。

子供達に対する大人の責任は重大だ。だからといって、子供達に至れり尽くせりする必要があるなどと言っているのではない。

色々な責任の果たし方があるだろう。しかし、何らかの形で崖っぷちに追いやられてしまった少年少女に対する大人の責任は、正しい答えの強要ではなく、相手に対してどれだけ真剣になれるかということに尽きると思う。

もちろん誰しもそれなりに努力はしている。しかし、そうした努力というのは、自分のポジションを守りながらできることをするという程度のことだ。真剣というのは、相手と差し違える覚悟を持つこと。いざとなれば自分のポジションを捨て去る覚悟を伴っているということだ。瀬戸際での大人の責任というのは、そういう覚悟と、覚悟があるからこそ生まれる気迫を、子供に見せることではないだ

ろうか。

北星学園余市高等学校の先生には、他の学校で文部科学省とか教育委員会の指導のもと教師として働きながら、自分の思い描いていた教師像はこういうものではないと考え、わざわざ北海道までやってきた人や、不良少年だった自分を生まれ変わらせてくれたこの学校の教師となって、かつての自分と同じような境遇の子供達を救いたいと考えている人もいる。そういう人達は、覚悟と気迫と情が、全身に漲っていて、まさに体当たりで子供達と接している。真剣にぶつかり、衝突し合い、真剣に語り合い、時には涙を流すのだ。またそういう先生ばかりだから、他の学校にいた時のように、“浮いてしまう”こともない。

崖っぷちにいる子供達に対して、大人が、社会的な装いで取り繕っていたのでは話にならない。捨て身になれる大人がどれだけいるか。そういう濃密な場がどれだけあるか。

人生というのは、本当に大事なものの為には、社会的に取り繕っているものを捨て去っていいのだということを、大人が子供に少しでも感じさせてあげられれば、崖っぷちの子供はどれだけ救われるか。

多くの子供は、本当に大事なことの為に崖っぷちに追いやられているのではなく、大人社会が表面的に取り繕っているものの為に身動き取れない状態となり、じわじわと崖に追いやられ、さらに大人が子供の為と言いながらかけてくる言葉や態度も、ほとんどが、社会的に取り繕ったものを強化するものばかりなのだ。

大人は、責任という言葉をよく使うが、それが管理責任という意味なら大間違いではないか。

一時のつまづきや、まわり道などは、人生においてちっぽけなものだということを、身を持って示すこと。それもまた大人の責任だと思う。なぜなら、そういう大人の態度こそが、子供達から将来に対する神経質な不安を取り除けるからだ。ちょっとしたつまづきが取り返しのつかない失態であるかのように子供達を追い込んでいくと、子供達は、逃げ場がなくなり、自暴自棄になるしかなく、こんな世の中なんて滅んでしまった方がマシだと思うこともあるだろう。(私も若い頃はそう思った。)

萎縮した小さな大人が、管理を口にすればするほど、子供からすれば学校だけでなく人生全体が窮屈でつまらなく感じられ、真剣に生きるほどの価値を見いだせなくなる。

一人でも多くの大人が、人生とは真剣に生きるに値するものだと身をもって示すこと。子供達の健やかさは、その延長線上にしかないと思う。

川崎の中一殺害事件の後、心がズシリと重くて、ずっと体調がすぐれないという人がけっこういる。4年前の東北大震災の時のように、遠く離れたところに住んでいても、この事件が、何らかの形で自分の人生を変えていくような気がしている人が多いと思う。

東北大震災の時は、震災をきっかけに仕事を変えたり、生き方を変えた人が多くいた。しかし、同時に、それまでの自分のポジションへの執着が強くなった人も多くいた。そういう人達は、ルールの厳格化、一致団結といった強い言葉を発する。それは、得体の知れない何かによって自分が脅かされる不安が膨らみ、自己防衛の意識が強くなるからではないだろうか。

でも本当は、そうした自己防衛の過剰が、ますます社会を息苦しいものにして歪めていく。

大事なことはむしろ逆で、自己防衛意識を緩めて、これまで自分達がやってきたことを見直して、できることから少しずつやり直していくこと。子供達をどうするかと言う前に、自分の人生を何とかすることが、大人の責任として残されている。

015年3月6日(金)風の旅人 編集長 佐伯剛

東北の震災から4年経った。特集番組を数多く見た。その中で港や道路や橋などインフラの復旧や一部の企業の再開が進んでいることは分かった。しかし数字から見ると復興というにはまだ程遠い。今も17万人あまりが仮設住宅に暮らす。災害公営住宅も全体の1/6程しか完成していない。原発の問題も何一つ解決していない。ドイツでは福島事故をみて原発の廃止を決めたのに、日本の政府は再稼働や新設まで検討している。命より経済だと。

一方、沖縄の基地の問題に関しても知事、県議、市長すべてが反対派であるにもかかわらず政府は民意を無視する。誰のための、何のための米軍基地なのか。

積極平和主義というごまかしの平和主義で武器を輸出し、戦闘に参加しようとする。70年間平和だった日本を国民を危険にさらすことになる。たった8日間アメリカが作ったといわれる憲法のおかげで日本は70年間戦争で人を殺さないできた。それに勝る憲法などできるはずがない。皆さんはどう考えますか。